

飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

第 376 回 日本人が、いなくなった！ ～「世の中、ちょっと変？」の理由がここにある～

2010.8.1

昔は、と言っても小生が幼い頃までは、身近に沢山いた「日本人」が、いなくなったような気がしてならない。ビジネスの中にも、政治や、毎日のテレビを見ても、なぜか日本人に見えないのである。かつては、大の男がか弱き母親に叱られつつ、それでも、いつまでも母親を尊敬していた。そして家庭における支柱は父親であり、母親のバックボーンに父親(おやじ)の存在があった。このおやじが怖かった。おやじとは実父のみならず、周りのおやじも恐かった。

この恐い、「信念の塊(かたまり)」みたいなおやじが、どこにも見受けられなくなってきた。「ヒトに迷惑をかけないこと」「嘘をついてはいけませんよ」とは、母親の決まり文句の筈だった。「弱いもの虐(いじ)めをしない」「正直でありなさい」「勇気とやさしさと責任を自覚しなさい」...殆んどの日本人なら、そんな家庭の中で、貧しさを享受しながら、着実に、かつ、慎み深く生きてきた。

国をリードする政治家が、子供も見ているテレビの前で、堂々と、しかも何回も嘘を言う。これはもはや、日本人社会ではないかもしれない。自分だけ目立とうとパフォーマンスを繰り返す。徹底的に相手を詰(なじ)り、叩き潰すことが論客だと思っている。**遠慮がちで、表現があいまいであることを奥ゆかしいとし、自己主張を控え、黙ってやり過ごすことを美学とする日本人には、かなりの違和感がある。**

「和をもって尊しとなす」日本人は、**礼儀正しく冷静で親切である。**むしろ自分を卑下して相手を立てるとい**う美学がある。**お互いを補い認め合う「貸し借り」は、日本的共生と融和、そして絆。むしろ信用を形づくるもので、義理人情につながっていく。相手を攻め立て、認めず、惨(みじ)めまでに打(ぶ)ちのめす手法は、日本人の美学にはない。

「イラ管」がどうか知る由(よし)もないが、誰の前でも突然切れて、不機嫌極まりない顔で周囲に当り散らす。日本人なら、**不愉快を隠すために笑顔を見せたりするが、それでも日本人同士なら「察する」美学があるはず。**やっぱり、彼は日本人ではないのだろう。

「敗軍の将、兵を語らず」～「失敗した者は、潔(いさぎよ)く自分の非を認め、あれこれ弁解がましいことを言うべきでない」という精神から、選挙に負けたらその統率者は必ず黙って責任をとった。桜を美しいと思う、「滅びの美学」を愛する日本人は、**引き際が美しいことをヨシとした、言い訳をしない潔(いさぎよ)さをもつ。**歴然とした敗軍に誰も責任をとろうとしない、だから多分、彼らは、日本人ではない。

それでも彼ら特権階級以外の日本人は、相変わらず辛抱強さを持ち備えている。空腹、枯渇、寒さ、猛暑、不眠その他の**苦しみに対する忍耐力は信じられないほどである。**これが多くの国民であり、有権者であると信じたい。

日本人でない、いや、日本人らしくない、いやいや、日本人の美学を持ち得ないということなのか、彼らパフォーマンス政治家たちは、この国を、一体どこへ、導いていくのだろうか？